

『龍圖公案』類話考

池 田 正 子

一 序 説

『龍圖公案』は、中國の犯罪ものの源泉といわれ、明末以降、最も多く讀まれた公案小説である。

主人公の裁判官、包拯は、日本の大岡越前守を彷彿とさせる實在の人物で、『宋史』卷三一六にその傳がみえる。⁽¹⁾字は希人、廬州合肥の人で、北宋の仁宗朝に龍圖閣直學士や知開封府などを歴任し、官吏の横暴をおさえることにつとめ、その清廉潔白な人柄が人々に慕われたといふ。⁽²⁾のちに包公は次第に傳説化され、⁽³⁾元代には、包公劇とよばれる一連の雜劇が次々とつくられていく。⁽⁴⁾そこでは包公の名をかりて、支配者である異民族の愚かさが諷刺され、その手先となって専横のかぎりをつくした胥吏達が厳しく批判されている。さらに明

代になると、包公は完全に理想化された名判官として小説や劇に登場する。里巷で「日斷陽事、夜斷陰事」と語られ、あらゆる難事件を解決していくその姿は、包公によせる當時の人人の期待と渴仰を反映したものであらう。

『龍圖公案』は、このような包公傳説を背景にして明の末期に成立した作品（百則の短篇からなる）で、そこにはつぎの二つのタイプの包公がえがかれている。

(A) 能吏型の包公。（四十六則）奇智を驅使し、犯人檢舉や犯罪審理の面ですぐれた手腕をふるう。話の大部分は、宋の桂萬榮『棠陰比事』や『明史』の「周新」に趣向をかりている。
(B) 神格化された包公。（三十六則）包公の超人的な能力は不思議な現象をヒントに事件を解決する。これには亡靈訴訟（夢告）、超自然的な現象による真相の暗示（死體の埋められ

た場所を告げるささやき・怪氣・蠅・蛇・鳥や、犯人の名を暗示する植物、動物報恩、神佛のおつげなどの形がある。⁽⁶⁾このほか、簡単な冥界審判が十則記されている。

ところで明の萬曆年間には、様々な犯罪事件とその裁判の顛末を記した犯罪記録集が多く出版されている。そこに収められた話にはそれぞれに訴狀と判決文がつけられ、各話は、事件の種類によつて謀害・強盜・強姦門などに分類されている。また六律總括や五刑定律などと題して當時の法律を詳しくのせたものもある。これらの記録集は、もともと役人の爲の判例覚え書きであつたのが、次第に民衆の娯樂的な讀み物として廣まつていったものと考えられる。

『龍圖公案』は、萬曆二十五年刊『包孝肅公百家公案演義』を藍本にした、當時の公案小説の總集篇ともいえるもので、のちの清代にブームをよんだ『三俠五義』『小五義』『施公案』『彭公案』をはじめとするおびただしい數の俠義公案小説の先がけとなり、また宋の『棠陰比事』とともに、日本の裁判物にも大きな影響をあたえた作品である。⁽⁸⁾

しかるに本書は、その文章の拙さの爲に大衆娯樂本として位置づけられ、これまでほとんど注目されることがなかつた。⁽⁹⁾しかし次章にものべるように、そこに收められた裁判譚

のほとんどは、萬曆刊行の裁判記録集に記された事件や當時傳えられていた宋から明にかけての、或いはそれ以前の小説筆記・法家書・劇・民間傳説などに題材をとつて脚色したものであり、この作品が裁判小説集であると同時に、一種の説話集としての性格をもちあはれていることがわかる。本稿では、趙景深によつて手がけられた包公説話に關する來源研究をふまえ、⁽¹⁰⁾百則全部についての類話集の作成を試みた。これは、特に明代の白話小説と當時の大衆文藝や演劇との關連を考えていく上で、興味深い資料を提供するものと思われる。なお宋以前及び清以後の作品にはあまりふれることができなかった。今後の課題にしたい。

二 資 料

現在見ることのできる『龍圖公案』の刊本は、「江左陶娘元乃斌父題於虎丘之悟石軒」と序に記された清代以降のもので、繁本（百則）と簡本（六十餘則）の二系統がある。

繁本には次の十・五・六・八卷本がある。

- (1) 十卷本 (a) 乾隆丙申（一七七六）封面「繡像龍圖公案姑蘇原板 李卓吾先生評」（本文中李卓吾の評はない） 四美堂梓行（早大圖・靜嘉堂） (b) 道光元年（一八二〇）封面「原

板繡像龍圖公案 聽五齋批評「貴文堂梓行（東洋文庫）」(2)五卷本 封面「繡像龍圖公案 新增百案 聽五齋評定」國史本傳と題した包拯の傳がつく。益智堂梓行（東北大圖・内閣文庫）(3)六卷本 光緒十八年（一八九二）濰陽成文信記梓（東文研）(4)八卷本 封面「繡像龍圖公案 百斷奇觀」兩餘堂藏板（京大人文研）

各本には、本文の前に各巻の第一話を描いた圖が十幅つき、(1)の(b)の各圖には、馮夢龍や湯顯祖等、當時活躍した文人に假託した題詩がつけられている。また(1)(2)(3)は對偶目次になっており、この章の類話表は(1)の(a)の目次による。

簡本は、書肆がその利益のために、百則本の各巻の後半部分を削って六十數則という簡便な形に編集したもので、十卷六十六則（乾隆乙未、一七七五、書業堂）や十卷六十二則（嘉慶壬戌 一八〇二 本坊藏板）など、書肆によって則數にちがいがみられる。なお「龍圖公案」は同治七年（一八六八）江西巡撫丁日昌によってだされた「淫詞小說查禁書目」で、禁書の第一にあげられている。

萬曆年間に刊行された公案小説については、これには二つの系統があり、南京萬卷樓刊行本(1)・(2)と上圖下文の全相本という體裁をとる建安刊行本(3)・(8)とに分けられる。

『龍圖公案』類話考（池田）

(1) 『新編包孝肅公百家公案演義』萬曆二十五年（一五九七）、饒安完熙生序、六卷百則、未見。『龍圖公案』の藍本といわれる。

(2) 『新刻海剛峯先生居官公案傳』萬曆二十四年（一五九六）李春芳撰、四卷七十一回、未見。

(3) 『皇明諸司廉明奇判公案傳』(a)上下二卷建安鄭氏萃英堂刊本 (b)林羅山手校本『新刊皇明諸司廉明奇判公案』四卷紋に「萬曆戊戌季夏之吉、建邑書林三臺山人余象斗言」とあることから、萬曆二十六年（一五九八）成立と考えられる。

(a)(b)とも内閣文庫 (c)明潭邑書林余氏雙峰堂刊本（蓬左文庫）

(4) 『全像皇明諸司公案傳』山人仰止余象斗編、三臺館刊本文臺余氏梓行（内閣文・國會圖）(3)の續編

(5) 『新刻名明鏡公案』七卷殘存四卷、葛天民吳沛泉彙編、三槐堂王昆源梓行（内閣文）

(6) (a) 『新編國朝詳情公案』殘存二・三・四卷、各話の最後に葛天民（號は無懷）の評（内閣文） (b) 『新編國朝李卓吾詳情公案』

陳繼儒撰、六卷、存仁堂陳懷軒刊東文研・蓬左文 (c) 『鼎撰名公詳刑公案』潭陽劉大華刊本、未見。

(7) 『新刻海若湯先生彙集古今律條公案』陳玉秀撰、師儉堂

梓行。(内閣文)

(8)『新刻京本通俗演義全像百家公案全傳』萬曆二十二年(一五九四)、書林朱氏與耕堂刊本、十卷、余象斗編、未見。
 (9)『新民公案』萬曆乙巳(一六〇五)吳遷、卷一の冒頭に「新刻郭青螺六省聽訟錄新民公案」とあり、書末に「延享元年甲子四月(一七四四)」と記されている。四卷四十五則。
 (牟潤孫「新民公案」大陸雜誌史學叢書第一輯『元明史研究論集』收、參照。)

なお類話表中では、(1)は『包』、(2)は『海』、(3)は『廉』、(4)は『皇』、(5)は『明』、(6)は『詳』、(7)は『律』、『龍圖公案』は『龍』と省略して示す。

また寶卷については澤田瑞穂著『寶卷の研究 第二部 寶卷提要』により、日本の翻案物は麻生磯次著『江戸文學と中國文學 第四章 裁判物の展開と支那文學の影響』を參照。
 (類話表の關係作品には、趣向の一部が關連しているものもふくまれる。)

卷	題名	關係	作品
一	阿彌陀佛講話		明、祝允明『九朝野記』の「治世余聞」。『廉』の「張縣尹計嚇兇僧」。明、晁瑛『寶文堂書目』の「合

觀音音苦
薩托夢嚼舌吐血
咬舌扣喚
鎖起包
袱

色鞋兒」。馮夢龍『醒世恒言』の「陸五漢硬留合色鞋」。同『情史類略』の「張蕙」。同『智囊補』の「臨海令」。民國、『折獄奇聞』の「惲子寬訊案如神」。『情史類略』の「張幼謙」。清、墨浪子『西湖佳話』の「斷橋情蹟」。

『廉』の「邵糸政夢鍾蓋黑龍」。『龍』の「桷上得上」「三官經」

宋、金盈之『醉翁談錄』の「張氏夜奔呂星哥」。『元代雜劇全目』の「王閨香夜月四春」。明、『湖海搜奇』『雙槐歲抄』の「釵釧記」。『律』の「戴府尹斷婚姻誤賊」。『喻世明言』の「陳御史巧勘金釵鈿」。『今古奇觀』第二十四回。『情史類略』の「柳鸞英」。『京劇劇目初探』の「血手印」。寶卷『龍圖寶卷』「双花寶卷」「陳英寶卷」。白子屋騷動として有名な日本の『大岡仁政錄』の「白子屋阿熊之記」は寶曆六年、江戸におこった事件に取材し(尾佐竹猛『犯姦集錄』)、話の趣向を中國の『龍圖公案』の「鎖起」「包袱」や『棠陰比事』の「向相訪賊」にとり、日本の『青砥藤綱摸稜案』の「懸井の段」や『大岡板倉二君政要錄』の「麴町加賀屋駿河屋一件」「金屋井筒屋が事」「白子屋庄三郎一件」と關連する。
 『廉』の「韓按院賺莊獲賊」。『龍』の「鎖起」「龍

葛葉飄來	騎龍背試梅花」「移椅倚桐同玩月」「借衣」。
招帖收去	『律』『詳』の「董推官斷問謀害舉人」
夾底船	『律』の「王滅刑斷拐帶人妾」。
接渡跡	『皇』の「辺郎中判獲逃婦」。
黃菜葉	『智囊補』の「辺郎中」。
石獅子	『律』『詳』の「吳推府斷船夫謀客」。
儉鞋	『包』の「東京判斬趙皇親」「東京復判趙皇親」。
儉鞋	『京劇劇目初探』の「劉趙王」
儉鞋	晉、干寶『搜神記』の「丹砂井」。
儉鞋	『包』の「東京決判劉駙馬」。
儉鞋	民國、林蘭『瓜王』の「王大饒的故事」。
儉鞋	『富陽民間故事』
儉鞋	宋、洪邁『夷堅志』の「王武功妻」。
儉鞋	『清平山堂話本』の「簡帖和尚」。
儉鞋	(入話は『玉泉子』の「杜羔妻」)
儉鞋	『寶文堂書目』『也是園書月』に「簡帖和尚」。
儉鞋	『海』の「斷僧圖通」。
儉鞋	『情史類略』の「金山僧惠明」「王武功妻」「鉛山婦」。
儉鞋	『諭世明言』の「簡帖僧巧騙皇甫妻」。
儉鞋	譚正壁『三言二拍源流述考』(『話本與古劇』收)によれば、『武林舊事』に「簡帖薄媚」。
儉鞋	『輟耕錄』に「錯寄書」。
儉鞋	宋元戲文に「洪和尚錯下書」という題目がみえ、越劇「紫玉壺」は、この話を題材にとったものという。
烘衣	『龍』の「儉鞋」「岳州屠」。
龜入廢井	『折獄奇聞』の「昭慶僧」。
鳥喚孤客	『廉』の「皇縣主義鴉訴冤」。
	『律』『詳』(東文研本)

臨江亭	の「陳府尹斷惡僕謀主」。
白塔巷	『詳』の「斷僻山僧殺」。
	『太平廣記』卷一七一『益都耆舊傳』の「嚴遵」。
	同卷一七二『西陽雜俎』の「韓滉」。
	宋、桂萬榮『棠陰比事』の「莊遵疑哭」。
	『輟耕錄』の「勘丁」。
	『太和正音譜』の「包待制雙勘丁」。
	『詳』の「听婦人哀悽聲」。
	『智囊補』の「子產・嚴遵」。
	『京劇劇目初探』の「雙釘記」。
	『折獄奇聞』の「韓滉」。
	女の哭聲で犯罪を察知するという趣向は、日本の『本朝櫻陰比事』の「妻に泣する梢の鶯」や『大岡政談』の「古道具屋鐵砲彌市が事」にみえる。
血衫叫街	『智囊補』の「蘇渙」。
	犯人を被害者と偽ってふれまわり、身内を捜したという趣向は、『棠陰比事』の「任城示靴」。
青靛記穀	『楊津獲絹』や、『折獄奇聞』の「高潜、楊津」にみえる。
裁縫選官	目印をつけた品を犯人にわざと盗ませて證據品とするという趣向は、『棠陰比事』の「彭城書案」や『龍』の「氈套客」。
厨子做酒	『陰溝賊』「賊總甲」にみえる。
殺假僧	『曲海總目提要』の「宋上皇御斷鳳釵」。
	日本の『青砥藤綱摸稜案』の「鐘旭申介の段」
	『太平廣記』卷三六五『集異記』の「官山僧」。
	『速水紀聞』の「向敏中所斷之案」。
	『棠陰比事』の「向相訪賊」。
	『海』の「通姦私逃」。
	『智囊補』の「向相訪賊」。

四		
三寶殿	賣皂靴	敏中。『初刻拍案驚奇』の「東廊僧怠招魔黑衣盜奸生殺」。『折獄奇聞』の「向敏中」。日本の『大岡政談』の「小間物屋彦兵衛之傳」。偽りの處刑によって眞犯人をおびきだすという趣向は、『棠陰比事』の「道議詐囚」「崇龜認刀」にみえる。
二陰筈	忠節隱匿 巧拙顛倒	『明』『詳』の「周按院判僧殺婦」。『明史』卷一六一「周新」。『折獄奇聞』の「周新」。『元代雜劇全目』の「王月英元夜劉鞋記」の後半。
	試假反試 眞・眞 死酒實死 ・色	忠臣と貞婦の訴。 馬鹿な男と結婚させられ、夫婦分配の不公平を訴える女。
陰溝賊	耗套客	『廉』の「劉縣尹判誤妻強姦」。
		『廉』の「洪大巡究淹死侍婢」。
		『海』の「姦夫盜銀」。『廉』の「吳縣令辨因奸竊銀」。
		『智囊補』の「吳復」。『明史』の「周新」「張涼」。
		『折獄奇聞』の「吳復」「江恂」。『棠陰比事』の「蔣常規竊」。「思彥集兒」に同様の事件の解決法がみえる。
		『廉』の「魯巡按表揚貞孝」。
		『廉』の「謝知州旌獎孝子」。眞犯人の頭上に雷が落ちるという趣向は、『棠陰比事』の「蕭儼震牛」にみ

五		
乳臭不凋	岳州屠	『太平廣記』卷一七一「朝野僉載」の「蔣恆」。『律』
妓飾無異	久鰥	『詳』の「岑縣尹證兒童捉賊」。
遼東軍	絕嗣	『皇』の「聞縣尹妓屈盜辨」。『智囊補』の「吉安老吏」。
	耳畔有聲	『折獄奇聞』の「吉安老吏」。
手牽二子	手牽二子	『律』の「傳大巡斷問謀娶殺命」。『情史類略』の「王瓊奴」。
聽外黑猿	耳畔有聲	『龍』の「烘衣」「偷鞋」。『情史類略』の「鉛山婦」。
港口漁翁	絕嗣	〔冥界審判〕 三十になっても及第できない男。
紅衣婦	善行を積みながら後嗣に恵まれない男。	〔冥界審判〕
烏盆子	『律』の「詳」の「韓代巡斷嫡謀妾產」。	『海』の「開許氏罪」。『皇』の「趙知府夢猿洗冤」。
	明、張景『補疑獄集』の「趙禱夢猿」。	
牙簪挿地	『曲海總目提要』の元雜劇「玳瑁瑤盆兒鬼」。同、	
繡履埋地	明傳奇「斷烏盆」。『京劇劇目初探』の「烏盆記」。	
蟲蛙葉	『三俠五義』第五回。器が冤罪を訴える話は『搜神記』の「怪老翁」や『後漢書』の王托の事にみえる。	
	『廉』の「奇府尹判拾拾銀」。『明史』の「周新」。	

八							
善惡回報	壽夭不均	三娘子	賊總甲	江岸黑龍	牌下土地	木印	石碑
<p>〔冥界審判〕 積善の男が早死にし、惡人が九十まで生きる話。</p> <p>金の方で善行を積んだ男が没落する話。</p> <p>〔廉〕の「楊評事片言拆獄」。『智囊補』の「楊評事」。</p> <p>〔廉〕の「汪太府捕剪鐵賊」。</p> <p>〔折獄奇聞〕の「張公禹知鉛山縣」。</p> <p>〔律〕の「徐代巡斷搶劫殺客」。『明史』の「周新」。『折獄奇聞』の「周新異政」。</p> <p>〔律〕の「馮縣尹斷木碑追布」。『詳』（東文研本）の「判路傍失布鄧大尹審」。『折獄奇聞』の「葛青天」「楊武」。『棠陰比事』の「定牧認皮」「滄州市脯」に同趣向の事件解決法がみえる。日本の『青砥藤網摸稜案』の「詮議動かぬ石佛の番」や『大岡板倉二君政要録』の「木棉盜人吟味之事」、『大岡仁政録』の「石地藏吟味之事」。</p> <p>〔冥界審判〕 試験官の不正で合格できなかった秀才。部下の手柄を横取りし、住民を殺害して敵の首とした將軍。</p> <p>〔搜神記〕の「隗炤」。『太平廣記』卷二一六『國史補遺』の「隗炤」。『海』の「判給家財分庶子」。</p> <p>〔廉〕の「勝同知斷庶子金」。『喻世明言』の「滕大</p>							
屈殺英才	假冒大功	扯畫軸					

九							
味遺囑	箕箒帶入	房門誰開	兔戴帽	鹿隨獐	遺帕	借衣	壁隙窺光
<p>尹鬼斷家私」。『曲海總目提要』の清傳奇「長生像」。</p> <p>『京劇劇目初探』の「鬼斷家私」。</p> <p>『海』の「判家業還支應元」。『廉』の「韓推府判業歸男」。『初刻拍案驚奇』の「張員外義撫螟蛉子包龍圖智賺合同文」。遺子の財産相續事件は『棠陰比事』の「司空省書」にみえる。日本の『青砥藤網摸稜案』の「加古飛丸と鏡岱との財産事」。</p> <p>〔廉〕の「姚大巡辨掃地賴姦」。</p> <p>〔廉〕の「嚴縣主誅誤翁姦女」。</p> <p>〔律〕の「魏恤刑因鳥鴉鳴冤」。『明史』の「王觀」。『折獄奇聞』の「剪舌」。</p> <p>〔律〕の「吳推府斷僻山僧殺」。『明史』の「周新」。</p> <p>〔皇〕の「陳按院賣布賺贓」。『喻世明言』の「陳御史巧勘金釵鈿」。</p> <p>〔廉〕の「康總兵救出威逼」。</p> <p>〔律〕の「蘇縣尹斷光棍爭婦」。</p> <p>〔律〕の「項縣尹斷二僕爭鵝」。『折獄奇聞』の「錢臨江斷鵝」。『棠陰比事』の「次武各驢」「憲之俱解」「季珪雞豆」。</p> <p>〔廉〕の「戴典史夢和尚皺眉」。</p> <p>〔廉〕の「黃通府夢西瓜開花」。血滴によって肉親を</p>							
桶上得穴	黑痣	青糞	和尚皺眉	西瓜和尚			

三 結 語

前章の類話例が示すように、『龍圖公案』に收められた話のほとんどは、當時語り傳えられていた民間故事や芝居・小説・法家書、或いは實際におこった事件などに題材をとって實話風の裁判話に再構成したものである。そこでは、神の

十			
銅錢插壁	『律』の「曹推官訪出債賊」。	みわける方法（滴骨親）は、孟姜女故事でよく知られ、宋の宋慈『洗冤集錄』や清の黃六鴻『福惠全書』にも實例がのる。 不正官吏のために死罪になり、一家離散のめにあった男。 利口で貧乏な男とバカなのに金持という男。	『律』の「曹推府斷拐帶好」。 『廉』の「海給事辨詐稱奸」。 『律』の「鄭知府告神除蛇精」。 『律』の「晏代巡夢黃龍盤枉」。 『詳』の「夢黃龍盤枉何按院」。
蜘蛛食卷	『廉』の「曹察院蜘蛛食卷」。		
鬼推磨	（冥界審判）		
裁 贓			
扮 戲			
畫器燈盞			
床被什物			
玉 樞 經			
三官 經			

如き名判官があらゆる難事件を解決して世の不正を正し、冤罪を受けた人々の恨みをはらすというおきまりのパターンが繰り返され、大衆讀物としての『龍圖公案』の特色が顯著である。本稿では最後に、百則の類話例のなから卷二の「偷鞋」をめぐる説話群をとりあげ、一つの話が如何に潤色されていったかを詳述して今回の結びとしたい。

卷二「偷鞋」は、一言でいうと「僧が人妻を手にいれる話」であり、『夷堅志』に收められた宋代の實話「王武功妻」の事件を下敷にしたものである。

ある僧が武功の妻に一目ぼれし、女に金牌のはいった「肉墜」を贈る。武功はそれを見て妻の行迹を疑い、府に訴えてこれを離縁する。僧はそのまま行方をくらまし、數ヶ月後、未決のまま實家に歸された女のもとへ使いを送って自分の寺で働かないかと誘う。そうして寺にやってきた女を自室の地下穴に閉じこめて弄ぶ。やがて隙をみて逃げだした女は、真相を役所に訴えてた後、自害する。

美しい人妻がこともあろうに佛に仕える僧に横戀慕され、謀られて弄ばれ、自害したというこの實話は、當時の人々にとってかなり衝撃的な事件であつたらしく、僧の墮落に對する批判をこめて劇に仕組まれ、小説にも作られている。（劇

としては、『武林舊事』には「簡帖薄媚」、「輟耕錄」には「錯寄書」、宋元戲文には「洪和尚錯下書」と記載されている。小説では、『清平山堂話本』に「簡帖和尚」があり、原話の女の自害という悲惨な結末が、前夫による救出・復縁というハッピーエンドに作りかえられている。

洪という還俗僧が皇甫の妻に懸想し、玉と金簪と情書をおくる。皇甫はそれを見て妻の貞心を疑い、訴えでて離縁する。女は親戚と名のる老婆にひきとられ、借金のカタに洪と再婚するはめになる。一方、皇甫は妻と別れたことを後悔し、ある寺で二人は再會する。女は身の不運を嘆く。

ある日洪は、女を自分のものにするまでのいきさつを話す。真相を知って怒った女が洪と争っている時に、皇甫がやってきて女を救いだし、洪を役所に訴えて復縁が叶う。

この話では、原話の不幸な女に對する作者の同情が因果應報にもとづく大團圓という結末で示され、それにそった人物設定がなされている。(離縁を後悔する前夫、いったんは女をうまく手にいれることに成功していながら、ふともらした言葉のために訴えられて裁かれる僧、一度は僧の策におちながらも後には真相がわかって救われる女。) また作者は、「僧の

計略」「僧の事後の告白」という趣向を女の運命のかわりめに巧みに使うことによって起承轉結をつけ、話に面白味を加えている。しかもこの趣向は當時好んで用いられていたように、たとえば「事後の男の告白」という形は、『京本通俗小説』の「錯斬崔寧」の結末にも使われ、男がちょっと氣を許してもらした言葉がついには自分の身を滅ぼすことを「口は禍の門」という俗語と結びつけて強い印象を与えている。また僧の謀り事によって妻が夫から貞心を疑われるという趣向(「僧の計略」)は、西遊記の説話の一つとして知られる李翠蓮故事の發端にもとられている。

さらに明代になると、馮夢龍はこの話を二つの觀點からとらえ、「簡帖和尚」を「簡帖僧巧騙皇甫妻」と改題して『古今小説』に再録する一方、この話の原話である『夷堅志』の「王武功妻」を『情史類略』に再録し、それに新しい解釋を加えて「金山僧惠明」と「鉛山婦」(『情史類略』)を創作している。

税家の妻周氏は、ベットの下にみしらぬ鞋が置いてあったことから夫に貞心を疑われ、すでに一子をなした間柄でありながら、一言の辯解も許されずに家を追われる。その後、還俗僧の惠明と再婚して一子をなす。惠明は夫婦仲の

睦じさにすっかり安心して、女を手にいれるまでの苦心を妻に話してしまふ。女は事の次第を訴え出、恵明は充軍の刑を受ける。（金山僧恵明）

ここでは、真相を知った女が驚愕のあまり、前後をわすれて役所に走りこむ姿が鮮やかにえがきだされている。真相を知った途端、かつてゆえなく離縁された時の恨みと悲しみがよみがえり、瞬時にして現在の夫や子に對する愛情を憎しみにかえてしまったのであろうか。この話には、「簡帖和尚」にみられるような前夫が女と別れたことを後悔するという設定もないし、訴えてた女がそのあとどうなったかということにもふれていない。作者が貞女、烈婦の枠を設けながら後日譚まで筆をのびさなかったところに、實は道義の枠を超えた女の魔性と業のおそろしさを書こうとしていたのではないだろうか。その氣配は、これが「鉛山婦」という殺人事件にしくまれ、「復讐する女」という姿でえがかれているところに一層鮮明である。

ある大雨の日、男は雷神に扮してかねてより懸想していた女の病氣中の夫を鐵棒でうち殺す。その後、男はこの女と結婚して一女をなし、あるやはり雷雨の夜、妻に真相をうちあける。女は何くわぬ顔をして笑いながら雷神の衣装

『龍圖公案』類話考（池田）

のかくし場所をききだすと、それを證據に男を訴えでる。

ところで『龍圖公案』には、前述の女のあだうち話をもとにしたものが三話（「偷鞋」「烘衣」「岳州屠」）收められている。それらは僧の計略・離縁された女と僧との結婚・僧の告白（男の告白が酒の酔いによるものとするところが『情史』の話と異なる）という構成をとる。たとえば「偷鞋」では、女は再婚した夜に酒に酔った夫から真相をきかされて自殺し、その夜亡霊となって包公の夢の中で事實を訴える。また「岳州屠」では、友人の妻に懸想した男が、その友を殺して女と結婚する。十年後の或る日、二子までなしたことすっかり安心した男は、酒に酔って當時の真相をうちあける。妻は夫を訴えて義婦として表彰されるというもの。この結末には、最初の夫に對する貞心という道德觀で女の行動を説明しようとする教訓的な意圖がみられる。

以上、宋代の實話にはじまる一連の説話は、僧に謀られて自害する女の話から、夫に救われて大團圓という形につくられる一方、明代では、女の仇討ち話となって當時の人々に強い共感をもってむかえられている。恐らくそれは、その頃、男の暴力をうけた女や一方的に不義をきめつけられた女が、結局は泣きねいりするか、あるいは自ら命を斷つことでしか

己れの身の潔白を示すことができなかった時代にあつて、できることなら、ほんのわずかでの間もよいから自分を堂々と主張してみたいという女達のひそかな、しかしながら強烈な願望を代辯するものであつたのだろう。更にまた、これまで耐えることになれてきた女が、すっかり油断していた男に突然のしつぽ返しをする痛快さが、一種のストレス解消法としてうけていたのかもしれない。日本にも「七人の子はなすとも女には心をゆるすな」という話が傳えられており、共通する女心を巧みにえがいたものとして興味深い。

〔注〕

- (1) 『宋史』卷三二六の包拯傳には、「拯立朝剛毅、貴戚宦官爲之斂手、聞者皆憚之。人以包拯笑比黃河清、童稚婦女、亦知其名、呼曰『包待制』。京師爲之語曰：『關節不到、有閭羅包老。』とみえる。また『龍圖公案』に收められた「割舌」の話は、本傳中の「有盜割人牛舌者、主來訴。拯曰：『第歸、殺而鬻之。』尋復有來告私殺牛者。拯曰：『何爲割牛舌而又告之？』盜驚服。」という事件を脚色したもので、百則中、包拯が實際にかかわった唯一の斷獄事件である。これは、宋の鄭克「折獄龜鑑」卷七にもみえ、錢和の裁判譚としても傳わると記されている。『棠陰比事』の「包牛割」。

- (2) 包拯の搜話は、宋の沈括『夢溪筆談』卷二十二（『學津討原』第十三集）や、『棠陰比事』の「孝肅杖吏」、宋の徐度『却掃編』（『學津討原』第十四集）、『宋史』包拯傳の「舊制、凡訟訴不得徑造庭下。拯開正門、使得至前陳曲直、吏不敢欺。」などの記録にみえる。

- (3) 金の元好問『續夷堅志』の「包女得嫁」に「世俗傳包希文、以正直主東獄速報司、山野小民、無不知者」とみえる。

- (4) 元代の包公劇については以下を参照。鄭振鐸「元代へ包公劇」産生的原因及特質」（『中國文學研究』57作家出版社、徐朔方「元曲中的包公劇」（『元明清戲曲研究論文集』57作家出版社、蘇同炳「元人雜劇中的包龍圖」（『涉史載筆』76臺灣學生書局）、岩城秀夫「元の裁判劇における包拯の特異性」（『中國戲曲演劇研究』）。

- (5) 裁判官に能吏型と神格化型の二つのタイプがあることは、中國の犯罪ものの特色の一つとなっており、實際の裁判においても神の裁きを信じる民衆の心理を利用した判例が『明史』や清の藍鼎元『鹿州公案』にみえる。なお『明史』については、吳晗「歷史中的小說」（『文學』第二卷）に詳しい。
- (6) 辛島曉「中國犯罪小説の一面」（『全譯中國文學大系—醒世恒言（四）』参照）。

- (7) 劉世德・鄭紹基「清代公案小説的思想傾向」（『文學評論』一九六二年 二期）魯迅「清之俠義小説及公案」（『中國小説』

史略』

- (8) 麻生磯次「裁判物の展開と支那文學の影響」(『江戸文學』第四章)

- (9) 『龍圖公案』についてふれたものは、魯迅『中國小說史略』に「文意甚拙、蓋識文學者所爲」、胡適「三俠五義序」(『胡適文存』第三集)に「大概是明・清的惡劣文人雜湊成的、文筆很壞、其中的地理・歷史・制度都是信口開河、鄙陋可笑。」とみえる。

- (10) 趙景深「包公傳說」(『小説閒話』)、李嘯倉「關於龍圖公案」(『宋元伎藝雜考』)。

- (11) 譚正璧「三言兩拍本事源流述考」(『話本與古劇』56上海古典文學出版社) 參照。

- (12) 澤田瑞穂「李翠蓮故事唱本考」(『中國文學研究』第三期)、趙景深「目蓮故事的演變」(『銀字集』) 參照。

- (13) 「大婢入」型昔話につけられた諺。また室町期の幸若舞曲『鎌田』に「ななの子はなすとも女に心ゆるすな、」ということばがあり、貞門派の俳書『毛吹草』卷二の「世話」にも「おとこ心と川のせは一やにかはる／七の子はなすとも女に心ゆるすな」とみえる。